

日峯社下窯跡の調査成果（3次調査～8次調査）

伊万里市教育委員会 船井向洋

1. 調査に至る経緯

平成15年9月16日に「大川内鍋島窯跡」として御用窯跡や藩役宅跡、御細工場跡等を含む約83,900㎡が国史跡指定を受けた。指定を受け平成19年3月には保存管理計画を策定し、平成26年3月に大川内山活用計画として史跡大川内鍋島窯跡整備計画を策定した。この整備計画では史跡地内を6か所のゾーンに区分し、順次発掘調査を行い整備を進めるように計画している。

計画では初期鍋島ゾーンについて他のゾーンと異なり、時期的に古い遺構があり、この異なった時代関係を早い段階で整理し、整備における本質的価値の適切な表現方法を見いだす必要があることや、初期鍋島の出現時期や歴史的な変遷など解明すべき点があるとしている。また発掘調査の着手条件の整っていたことから、初期鍋島ゾーンの日峯社下窯跡の調査を開始した。

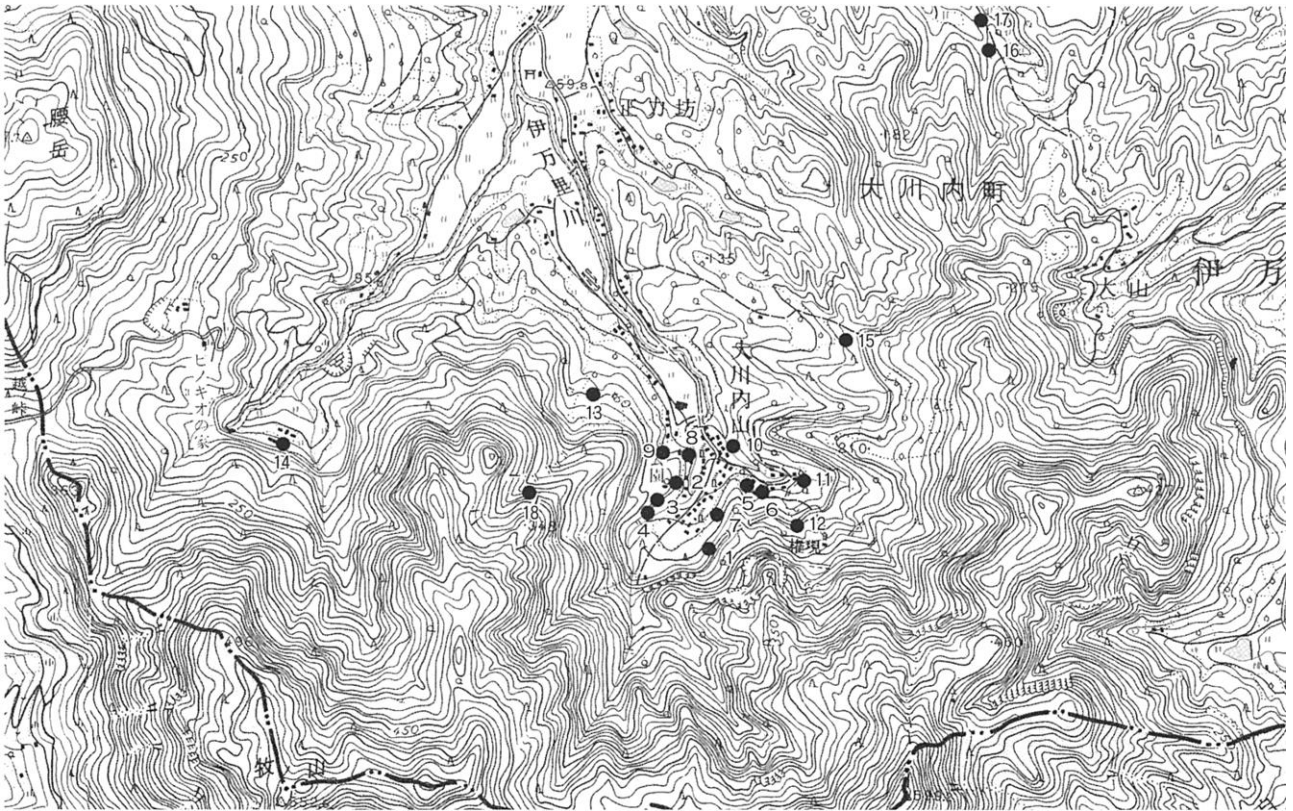
なお、日峯社下窯跡は過去2回の小規模な確認調査を実施しており、これらを1次調査（平成元年度）、2次調査（平成12年度）としているため、史跡整備に伴う初回調査を3次調査（平成26年度）とし、それ以降、年度ごとの続き年次としている。3次調査から8次調査（令和元年度）まで現地での発掘調査を行い、令和2～3年度にかけて3次～8次調査の整理作業を行っている。今回の発表は整理途中の中間的な成果発表であることにご留意いただきたい。

2. 位置環境と周辺の窯跡

大川内山は伊万里市の中心市街地から南東方向約4.5kmに位置している。江戸時代の肥前では窯業生産の地域（窯場）を「山」と呼称し、農業地域の「村」と区別していた。大川内山の南側には青螺山（標高599.2m）から牧ノ山（標高552.6m）へと山稜が続き、屏風岩、とんご岩と呼称されるような急峻な地形による、独特な景観が見られる。大川内山の集落内には権現川と伊万里川〔地元では清源（せいげん）川、正力坊（しょうりきぼう）川とも呼称されている。〕の2本の川が流れており、集落の北側で合流し北方向へと流れている。

大川内山及びその周辺では水害等で消滅したと思われる窯跡もあるが、現在、13カ所の窯跡が確認されている。古い時期の窯跡では桃山時代の古唐津などが出土しており、新しい時期の窯跡では明治期のものが出土している。幾つかの窯跡については確認調査等が行われ、窯構造や焼成品についての基礎資料等が得られている。

日峯社下窯跡と同時期の窯跡としては、御経石（おきょういし）窯跡と清源下（せいげんしも）窯跡がある。これら3つの窯跡は磁器焼成を主体としていた窯であるが、これら3つの窯跡に先行し影響を及ぼしたような窯跡は確認されていない。



周辺窯跡分布図

1. 日峯社下窯跡 2. 御経石窯跡 3. 清源下窯跡 4. 清源上窯跡（三本柳窯跡）
5. 鍋島窯跡（鍋島藩窯跡） 6. 二本柳新窯跡 7. 精巧社窯跡 8. 三本柳高麗神窯跡
9. 三本柳新窯跡 10. 権現谷高麗神窯跡 11. 権現谷窯跡 12. 不動尊上窯跡
13. 徒幾川内窯跡（六本柳窯跡） 14. 牧山櫓谷窯跡 15. 正力坊窯跡
16. 市の瀬高麗神上窯跡 17. 市の瀬高麗神下窯跡 18. 青磁鉍石採石所

（1）御経石窯跡（伊万里市大川内町三本柳一）

窯構造： 燃烧室（胴木間）を加えた全長は推定で 48m、連房式登窯と考えられる。胴木間を除いた焼成室数は 12 室と推定される。胴木間から全長の 1/3 程度までの焼成室は上位に移るにしたがって、焼成室の法量が増加する形態である。中位以上の焼成室の奥行きについては、差異は見られないが、幅については 1 室分しか確認ができていないため明確ではない。

出土遺物： 窯体の調査だけのため遺構に伴う出土遺物が少ない。砂床上で出土したものは呉器手碗と京焼風陶器碗、染付網目文碗などである。基本的に日常的な磁器を中心として焼成していたと考えられる。

発掘調査による出土品ではないが、物原からの崩落による 2 次堆積層と想定される場所から、口縁部を小さく折縁に作り、高い高台、畳付部分の面取りなどの特長がある白磁皿と、釉薬が厚くかかり、色合いが深い三階松文皿と思われる鍋島的な青磁の変形皿の破片が出土している。

（2）清源下窯跡（伊万里市大川内町三本柳一）

窯構造： 燃烧室（胴木間）付近が削平を受けており全長、焼成室数は不明である。現存する状態での全長は推定で約 32m、8 室程度の焼成室である。連房式登窯と考えられる。

出土遺物: 基本的に日常的な磁器の碗を焼成していた。その文様は網目文が中心であり、他に草花文、竹文など植物を描いたものや、山水文など多種である。高級磁器は出土していない。初期鍋島としては青磁変形皿の破片と、遺構と伴わないが紗綾形の地模様のある染付皿の破片が出土している。また、螺旋状の白色象嵌の碗、練り込み手の碗、特異な陶器碗と陶器火入なども出土しているが、消費地での出土例がなく試作的な製品の可能性が考えられる。

3. 調査の概要

日峯社下窯跡は伊万里市大川内町二本柳に所在している。調査の結果、階段状連房式登窯であることを確認した。全長（水平距離）は約 52m、燃焼室（胴木間）を除いた焼成室数は 15 室と推定される。第 2 室、第 3 室は後世の土地造成で削られている。窯跡の角度は 15°、焼成室の床面は水平である。焼成室の窯壁から改修痕跡を確認している。特徴的な痕跡として、第 7 室で天井を支えたと思われる柱の痕跡を確認している。各焼成室の規模は以下の表のとおりである。

物原（失敗品の廃棄場所）は窯体の右側である。初期鍋島は主に窯体の中央付近に位置する第 6～9 室に近い物原から出土しており、これらの焼成室で初期鍋島を焼成していたと考えられる。また、廃棄された初期鍋島を含む物原はマウンド状となっており、中央より上位の焼成室で焼成された一般製品を廃棄した物原と区分されていたと思われる。

窯体と物原の間に空間地があることを確認した。空間地は水平で焼成室に合わせて階段状になっていると思われる。中央付近の空間地の法面部分は石垣積みとなっている。空間地と物原の間で、上下に移動するための通路状の遺構を確認した。

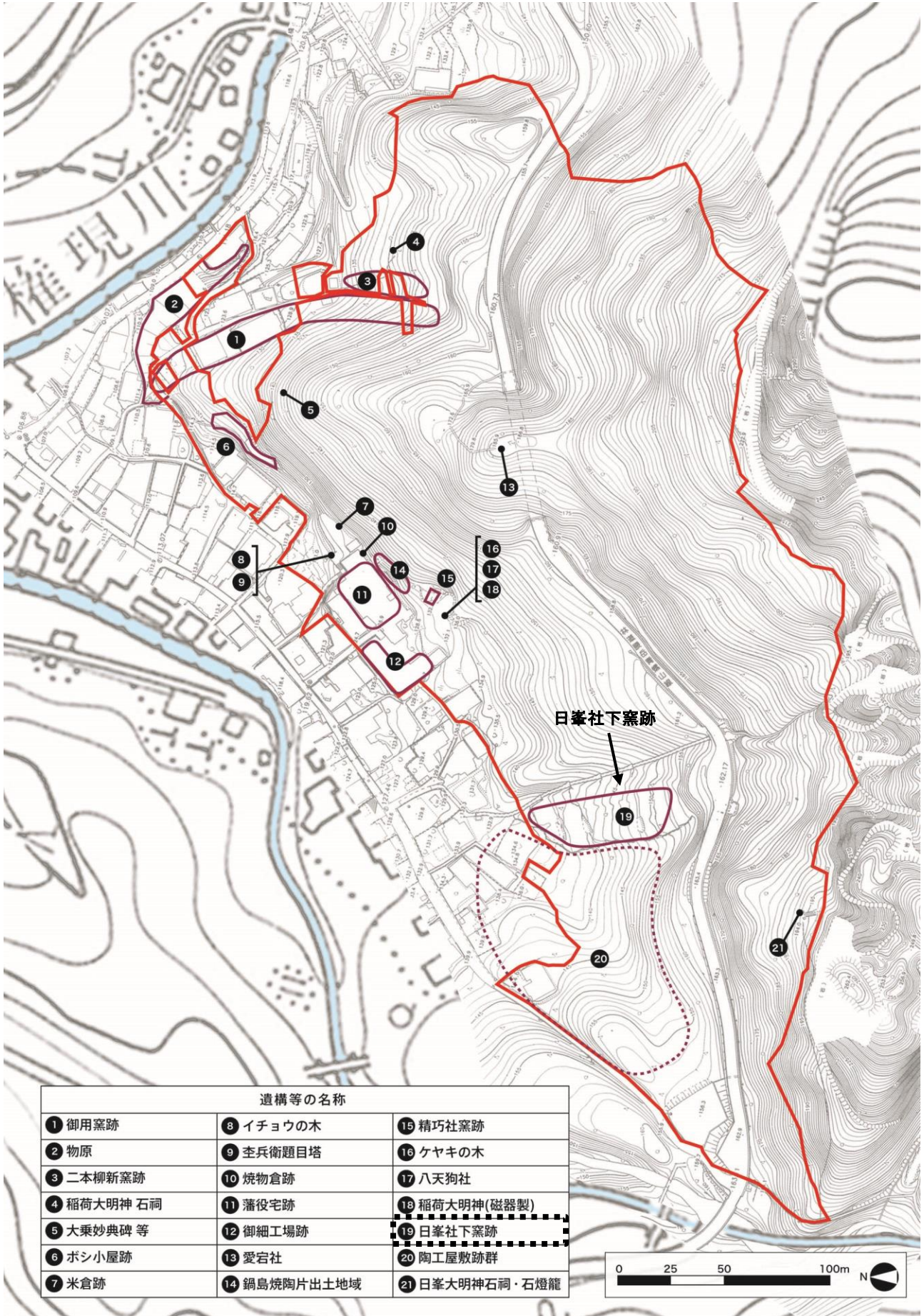
最終的に物原は、通路状の遺構や空間地の一部を覆うまで拡大していることを確認した。

焼成室の規模

焼成室No.	幅 (m)	備考	奥行	備考
第 15 室	—		3.05 (?)	
第 14 室	3.43	①	3.48	②
第 13 室	4.70	中央部	3.70	②
第 12 室	4.20	①	—	
第 10 室	4.80	③	3.42	②
	5.08	中央部		
第 9 室	4.25	①	3.90	②
第 8 室	4.48	①	3.27	②
第 7 室	4.28	①	3.55	④
第 5 室	3.92	①	3.40	②
第 1 室	2.52	①	2.10	②
燃焼室 (胴木間)	2.25	①	—	

①奥壁砂床面 ②前室の奥壁から自室の奥壁まで

③報告書数値 ④第 5 室奥壁から第 7 室奥壁までを 2 分割



国史跡大川内鍋島窯跡 遺構等の分布図



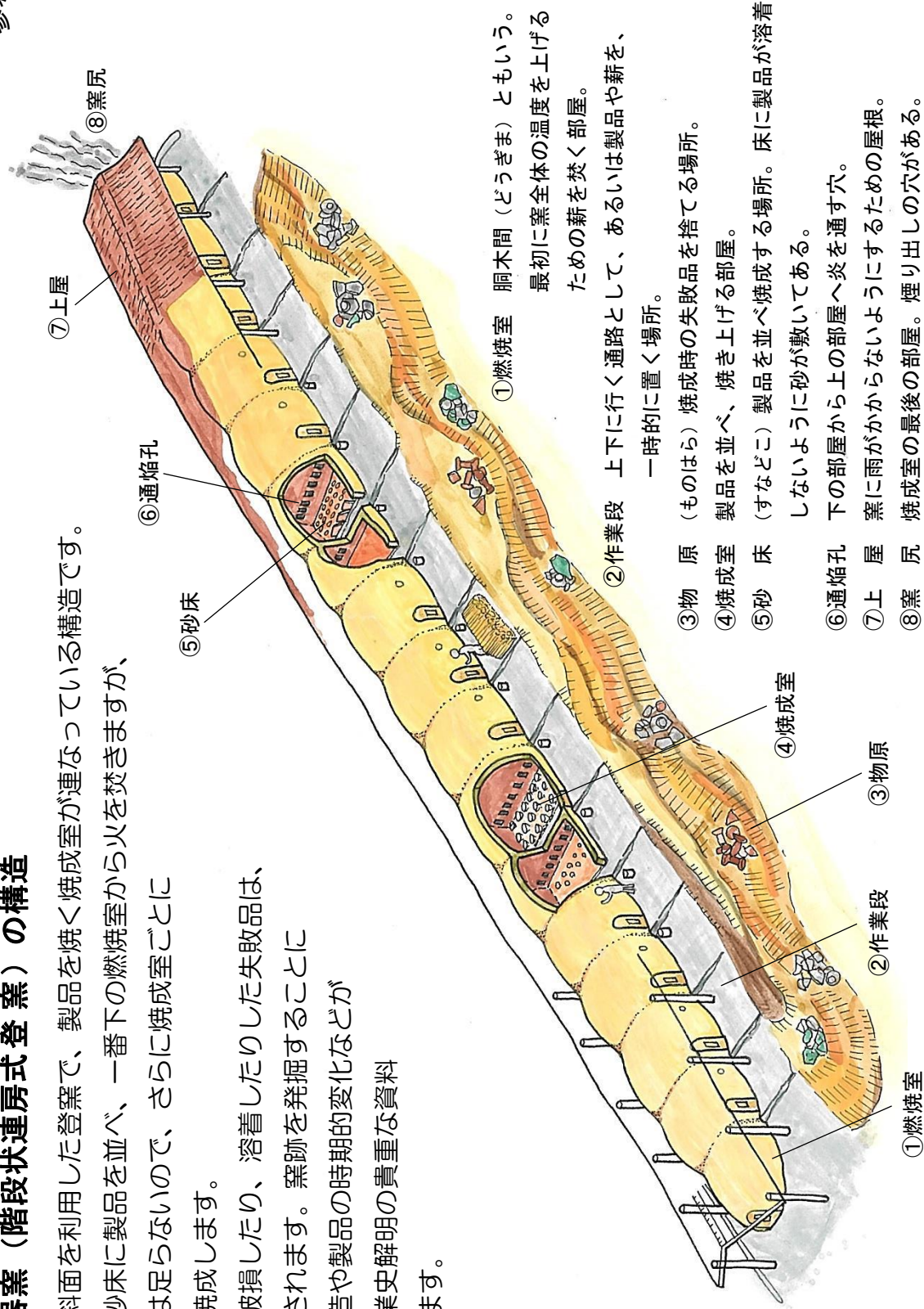
日峯社下窯跡 遺構図及びトレンチ配置図

肥前陶磁器窯（階段状連房式登窯）の構造

参考資料

窯は山の斜面を利用した登窯で、製品を焼く焼成室が連なっている構造です。各焼成室の砂床に製品を並べ、一番下の燃焼室から火を焚きますが、それだけでは足らないので、さらに焼成室ごとに薪を加えて焼成します。

焼成中に破損したり、溶着したりした失敗品は、物原に廃棄されます。窯跡を発掘することによって窯構造や製品の時期的変化などがわかり、窯業史解明の貴重な資料となっています。



①燃焼室 胴木間（どうぎま）ともいう。最初に窯全体の温度を上げるための薪を焚く部屋。

②作業段 上下に行く通路として、あるいは製品や薪を、一時的に置く場所。

③物原（ものはら）焼成時の失敗品を捨てる場所。

④焼成室 製品を並べ、焼き上げる部屋。

⑤砂床（すなどこ）製品を並べ焼成する場所。床に製品が溶着しないように砂が敷いてある。

⑥通焰孔 下の部屋から上の部屋へ炎を通す穴。

⑦上屋 窯に雨がかららないようにするための屋根。

⑧窯尻 焼成室の最後の部屋。煙り出しの穴がある。

4. 窯構造

窯の最下位には燃焼室（胴木間）がある。焼成室の番号は胴木間の次の焼成室を第1室とし、上位に向かって第2室、第3室とする続き番号を付した。最後の第15室は窯尻とも称される。また、本文中、右・左、右側・左側、右側壁・左側壁、右側窯壁・左側窯壁と表記するが、いずれの場合も燃焼室から窯尻方向に向かってみた場合の右、左の意味である。

燃焼室は焚口部分が削平されていたが、奥壁の左右隅部分を確認した。第1室は奥壁の左右隅部分を確認した。第2、3室は削平を受け残存していない。古地図などから江戸時代後期にはすでに削平されていたと考えられる。

第4室は奥壁の左右隅部分を確認した。第5室は奥壁の左右隅部分と中央付近の砂床を確認した。第7室は奥壁を確認した。第8室は奥壁と砂床の一部を確認した。第9室は奥壁の左右隅部分を確認した。第10室は1次調査で奥壁部分を確認している。今回の調査では奥壁の左右隅部分を確認し、また左右の側壁の一部を確認した。

第11室は奥壁中央の一部を確認した。第11室は2次調査で奥壁部分を確認している。今回は奥壁の右側隅を再度確認した。第13室は奥壁中央の一部と右側壁の一部を確認した。第14室は奥壁中央の一部と左右隅部分を確認した。第15室（窯尻）は奥壁の一部を確認した。以下、特徴的な遺構について詳述する。

（1）燃焼室（胴木間）（どうぎま）

2次調査で燃焼室と想定された箇所について調査範囲を広げて調査し、奥壁の左右の隅部分を検出した。奥壁の幅は約2.25mである。壁は砂床に対して垂直ではなく約55度の斜面となっている。壁は強い被熱を受けておらず溶解が進んでいない。

砂を敷いた整地面を検出した時点で掘り下げを終了した。砂は明黄褐色のまま被熱を受けた痕跡がないため、整地した状態で操業を終えたと考えられる。2次調査で最終の砂の整地層から約10cm下に窯造成時も整地層と思われる層を確認している。側壁側は弧を描いて立ち上がっている。

胴木間の奥壁右隅から右側側壁に沿って約1mのところまで岩盤（もしくは巨岩）がある。胴木間の築造時は岩盤を削り、その岩盤に直接、黄白色の粘土を塗り付けて壁窯を成形したと考えられる。岩盤のない部分について、一部ではあるが窯壁の粘土材が旧表土に直接乗っている箇所を確認した。燃焼室では窯壁の基礎としてトンバイや石材を使用した痕跡はなかった。



燃焼室（南東から）



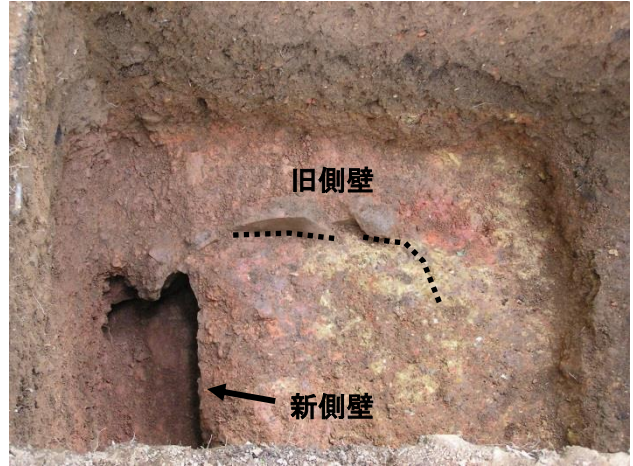
燃焼室（北東から）

(2) 第4室

削平を受けた奥壁の左右隅部分を確認した。調査範囲を限定したため砂床面までは掘り下げていないため、残存する窯壁の高さは不明である。右側隅部分の検出面で改修痕跡を確認した。改修はもともとの右側隅から延びる右側側壁部分の崩落もしくは不具合を補修するためと思われるが、右側壁を一気に約65cm厚くしており、補修としてはかなり大がかりなものであったと想定される。



第4室 奥壁左側隅（北から）



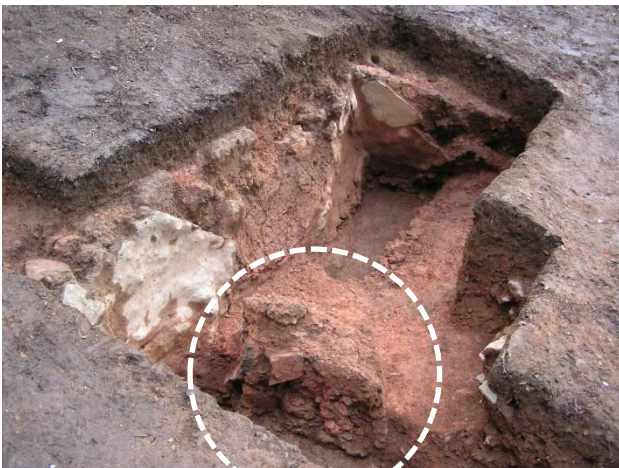
第4室 奥壁右側隅（北から）

(3) 第7室

削平を受けた奥壁の左右隅部分を確認した。奥壁の幅は4.28mである。奥壁部分は右側で砂床から高さ約65cm、左側で最大で49cm残存している。

特徴的なものとして柱の基部を確認した。柱の基部は右奥壁隅から約1.5m中央に寄り、奥壁から約20cm離れた場所に位置する。直径は窯の主軸方向で約40cm、主軸の直行方向で約48cmの楕円形で砂床から約35cm残存している。肥前系の窯跡は天井部の支えを含め、すべて壁構造となっており、基本的に躯体として柱を使うことはないため、この柱は補修のための柱と考えられる。(註1)

また第8室の東側トレンチでは破砕された窯壁が多量に出土しており、製品がほとんど含まれないことから、作業終了後、窯を解体した時の残骸を廃棄したと考えられるが、その中にも円柱状の塊(図2)



第7室 柱検出状況（北東から）



第7室 柱検出状況（北から）

が出土している。これらのことから、第7室には柱が立っており、天井部の崩落を支えるためと想定され補修としてはかなり大がかりなものであったと思われる。

(4) 第8室

削平を受けた奥壁を確認した。奥壁の幅は4.48mである。右側側壁は奥壁の右側隅部分から約90cmの場所で削平を受けており、左側側壁は奥壁の左側隅部分から約70cmの場所で削平を受けている。奥壁は中央から右側で砂床面から最大で45cmしか残っておらず、中央から左側では砂床面から最大で55cmしか残っていない。それぞれ吸気孔の痕跡等は確認できなかつたため、吸気孔はこれよりも高い位置にあると思われる。

奥壁は全面的な補修を受けており、旧奥壁の残存部から20~30cm厚くして新奥壁が形成されている。奥壁面には水に溶かした粘土〔泥漿（でいしょう）？〕が複数回塗られ、補修された痕跡が確認できる。

左側窯壁の外側に現状で幅約55cmの溝を確認した。焼成室自体が地形の傾斜に沿って削平を受けているため、溝も線状につながっておらず、削平の状況によって破線状になっている。雨水等を流す溝と考えられる。

砂床面で染付団龍文小皿の破片、網目文碗（図3-1）、鉄釉碗（図3-2）が出土した。また右壁側にはトチンが集中して出土した。



図2



第8室（東から）



第8室 奥壁右隅（北から）



図3



(5) 第15室(窯尻)(かまじり)

第15室より上位の焼成室の存在を確認するためトレンチを設定したが、被熱などによる土色の変化等は確認できなかった。また、第15室よりも上位の地形は斜面地となっていることから第15室が窯尻であると判断した。

第15室は破損がひどく奥壁の一部だけを確認した。

検出した奥壁の右部分はやや曲がり気味であることから、他の焼成室の奥壁が直線であるのに対し、窯尻の奥壁は丸みのある形状も想定される。

奥壁は床面から40cm程度しか残存しておらず、煙出しの穴は確認できなかったが、奥壁の南側外部の地面の一部が被熱により赤色となっている部分を検出した。この被熱の変化箇所は焼成室の砂床から約80cmの高さがある。推定ではあるが、この高さが煙出しの位置であり、外部の地面の被熱変化は煙出しからの炎によるものと思われる。

窯壁の芯材として部分的に石が使われていることを確認している。



第15室 奥壁(西から)



第15室 奥壁(北西から)

5. 窯に伴う付帯施設

窯に伴う付帯施設として、窯体(窯本体)と物原の間に空間地があることを確認した。一般的に焼成室の出入口側に窯の上位や下位に移動したり、薪や製品を仮置きしたりするための、通路を兼ねた幅1~2m程度の作業段があり、さらに作業段の外側に失敗製品を廃棄する物原がある。空間地の幅は第8室付近で約6m、第10室付近で約8.5mを確認した。以下、詳述する。

(1) 第8室付近空間地

第8室と第9室に関する空間地を確認した。空間地の西側には通路と推定される幅70~80cmの遺構があり、さらにその西側が物原となっている。

第8室の空間地と第9室の空間地の比高差は約80cmである。法面は自然石を積んだ石垣となっており、石垣は新旧2時期ある。第8室の空間地と(法面の下の平面)のレベルと第8室の砂床面はほぼ同レベルであり、また、第9室の空間地と(法面の上の平面)のレベルと第9室の砂床面(奥壁)のレベルでは、砂床面(奥壁)のレベルが18cm高いが、後世の削平等を勘案すればほぼ同レベルであったと思われる。

旧石垣は窯壁の外側から、窯の主軸に対してほぼ直角に約5m伸びている。石垣の最後は通路につな

がっている。

新石垣は主軸に対して南方向に約 15 度振った角度で西方向に伸びそのまま、旧石垣に擦り付くのではなく、旧石垣に接する箇所では北西方向に屈曲していると思われる。（この屈曲部から延びる部分が立木により確認ができなかったため、屈曲していると判断するにはやや情報量が不足しているが、現時点では新石垣は曲がっているとしておきたい。）この屈曲付近の石垣には窯道具（トチン・ハマ）が挟まっている状況であった。

通路と判断した遺構は、上面が固く締まっており、1 段だけではあるが扁平な石を置き階段状にした部分もある。また、土層断面から厚さ約 4 cm の層が 3 段階に分かれて堆積していることから改修もしくは整地を繰り返していたと考えられる。この通路より西側（窯体からさらに離れた場所）が物原となっている。この新旧の石垣と通路部分表面の改修面（もしくは整地面）は、物原の拡大と関係があると想定される。

- ①旧石垣と通路（最古）が作られ操業が開始される。
- ②物原が形成され、マウンド状に堆積する。堆積の途中で 3 回の整地が行われる。
- ③物原部分が拡大し通路部分を覆う。この時点で当初の通路部分は使用されなくなり、別位置に移動したと思われる。この通路部分の埋土中に海外輸出用と思われる染付団龍文小皿（図 4）が出土し、埋土の上層部分では海外輸出用の染付唐花唐草文合子（図 5）と染付牡丹唐草文鉢（図 6）が出土している。
- ④物原がさらに拡大し、通路部分がすべて覆われ、さらに物原からの崩落を防ぐため新石垣を設置したと思われる。



第 8 室付近空間地（西から）



第 8 室付近空間地（北東から）



第 8 室付近空間地（北から）

主な出土遺物

埋土の上層から瑠璃釉の猪口（図7）が出土している。内面、外面ともに鋸歯状に釉を掻きとっている。他のトレンチからも同種の破片が出土しているが表土層や埋土などからの出土である。江戸城跡汐見多聞櫓台石垣地点から輪花形ではあるが同一意匠の製品（図8）が出土している。



図4 染付団龍文小皿（スケール 10 cm）

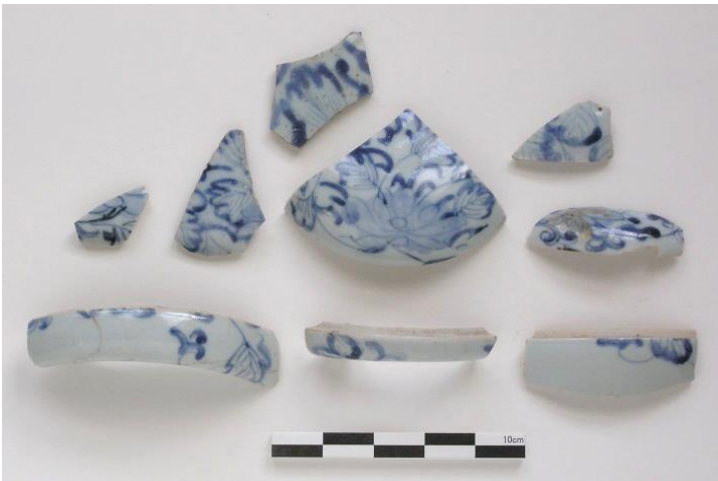


図5 染付唐花唐草文合子（スケール 10 cm）



図6 染付牡丹唐草文鉢（スケール 10 cm）



図7 瑠璃釉の猪口（スケール 5 cm）



図8

(2) 第13室付近空間地

第13室の西側に広い空間地があることを確認している。第12室の西側にも平坦地を確認しているが西方向への広がりには確認していない。第12室の平坦地と第13室の空間地との比高差は約65cmである。法面に石垣などの施工はされていなかったが、一部に石が残っており、また石の抜き取りとも思われるような痕跡もあることから、石垣があった可能性もある。

第12室の平坦面（法面の下の平面）のレベルと第12室の砂床面はほぼ同レベルであり、また、第13室の空間地と（法面の上の平面）のレベルと第13室の砂床面はほぼ同レベルである。

第13室の空間地の西端に物原を確認しており、窯体から物原検出箇所まで最大で約10mの空間地を確認した。物原の範囲は2次調査の結果から第13室での物原検出箇所から急激に東方向（窯体側）に入り込んでいると考えられる。



第13室付近空間地（西から）



第13室付近空間地（東から）

6. 物原

物原は窯体の右側である。窯体の中央付近に位置する第6～9室に近い物原で初期鍋島を含むマウンド状の物原を確認し、中央より上位の焼成室で焼成された一般製品を廃棄した物原と区分されていたと思われる。以下、関係するトレンチについて南方向から詳述する。

〔トレンチ（Tr）は試掘坑の意味である。「Tr」はトレンチの略号であり「Tr○」はトレンチの場所を示している。また、トレンチの位置関係を示すため「第○室Tr○」という表記をするが、トレンチの位置を示すものであり、第○室で焼成された製品がTr○に廃棄された意味ではないことにご留意いただきたい。〕

(1) 第10室 Tr6

南北方向にトレンチを設定した。トレンチの北側部分の旧表土直上でマウンド状物原の南端を確認した。物原全体の堆積方向は地形の傾斜と同様に南から北に向かって堆積しているが、マウンド状物原部分は北から南に向かって堆積しており、地形の傾斜とは逆向きとなっている。このことからこのトレンチの北端がマウンド状物原の南端であると判断した。マウンド状物原層からは鍋島焼が出土している。

特徴的な堆積層としては中位に位置する層（12b層・マウンド状物原層より上層）が窯壁の粘土が被熱を受けた部分（明赤褐色粘質土）と受けていない部分（黄褐色粘質土）を削り取ったと思われる土質



であり、窯体壁の小片も多量に混じっている。大部分は被熱を受けた削り片である。磁器片や窯道具などの遺物は混入していないことから、窯の改修時に出た廃材、排土と推定され、この時点で何らかの窯補修あるいは改修があったと思われる。

マウンド状物原層以外の層は日常的な製品の廃棄であり、鍋島焼の陶片が少量混じる程度である。堆積状況から第10室もしくはそれより上位の焼成室で焼成された製品の廃棄と考えられる。

第10室 Tr6（南西から）

主な出土遺物

マウンド状物原層から出土した鍋島焼としては鋸歯状文様の高台片（図9-1）、染付猪口胴部（図9-2）染付の唐草文様の胴部などがある。特異なものとして、小片の染付製品（図10）が出土している。小片のため文様は不明であるが、文様は線書きし内部をダミで塗り、さらに全体を薄瑠璃で全体を塗り込めている。敲打痕跡と思われる痕があり、小片となっており鍋島焼の廃棄方法に準じている。



図9



図10



図11 染付唐花唐草八角猪口

下層（13・14a層）で染付唐花唐草八角猪口（図11）の破片が出土している。第8室Tr8（17・24層（12・13・14・15））出土の遺物と接合した。

中位層（12a層）から染付皿（内面文様の意匠不明 薄瑠璃が施され、葉脈が白抜線となる。）（図12）の破片が出土している。第6室Tr7の最下層（22c最下層・42層直上）出土の破片と接合した。

上層から青磁大皿(図13)がまとまって出土している。高台内は蛇ノ目釉剥ぎ後、鉄漿を塗っている。チャツの痕跡は破線状となっている。



図12 染付皿(スケール5cm)



図13 青磁大皿(スケール10cm)

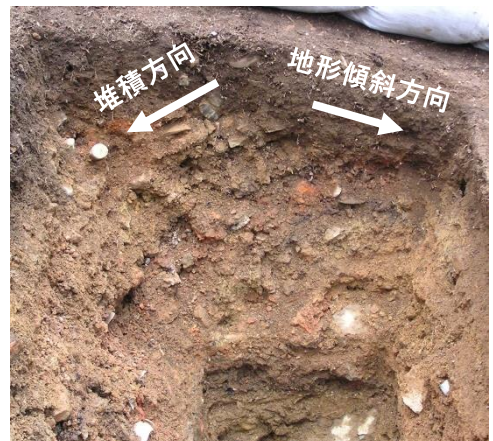
(2) 第9室 Tr7・Tr9 (Tr7は4次調査、Tr9は7次調査で実施)

Tr7はマウンド状物原の縁辺部に位置し、Tr9は第8室付近空間地で説明した通路部分である。Tr7・Tr9の南側壁面ではマウンド状物原の縁辺部と通路部分の堆積状況の確認ができる。また西側壁面ではマウンド状物原の堆積が地形の傾斜とは逆向きとなっている状況を確認できる。

マウンド状物原から鍋島焼の破片が出土している。



第9室 Tr7 (北から)



西側壁面 (東から)

主な出土遺物

窯築造時の排土層の直上層（11層）で染付吹墨梅文輪花皿（図14）と白磁草紙文小皿（色絵素地？）（図15）が出土している。

白磁草紙文小皿の破片の一部には紗綾形文の陽刻がある。裏文様も高台文様も描かれていない。伝世品として銹瑠璃釉色絵草紙文小皿（図16）が知られているが、伝世品の裏文様は花唐草、高台部には鋸歯状文が描かれている。

窯築造時の排土層の直上層（10b層）で色絵素地透台付皿（図17）と染付窓絵花蝶文変形皿（図18）が出土している。染付窓絵花蝶文変形皿は第8室 Tr 7（12層）から出土したものと接合した。



図 14
染付吹墨梅文輪花皿



図 15 白磁草紙文小皿（スケール 5 cm）



図 16



図 17 色絵素地透台付皿（スケール 5 cm）



図 18 染付窓絵花蝶文変形皿（スケール 5 cm）

(3) 第9室 Tr 8

Tr 8はマウンド状物原の縁辺部ではなく、堆積層の厚い箇所と考えられる。西側壁面では堆積方向が地形の傾斜と同じ北方向に傾いているが、南側壁面では堆積状況に傾きが見られないことから、盛り上がった頂上部に近い場所であることも考えられる。

主な出土遺物

下位層（9a層）から色絵素地梅流水文輪花皿（図19）が出土している。

中位層（6・7・8層）から染付唐花雪輪文皿（図20）が出土している。口縁部が輪花状に破損しており、また打点と思われる箇所がある



第9室 Tr 8（北から）



図19 色絵素地梅流水文輪花皿（スケール5cm）



図20 染付唐花雪輪文皿（スケール5cm）

ことから、皿を回転させながら、意図的に破壊したと思われる。裏文様は唐花唐草繫文で高台文様は四方禳文である。唐花唐草繫文と四方禳文の組み合わせは約束事として決まっているとされている。

中位層（6層）から梔子（くちなし）文三稜形皿の素焼製品（図 21）が出土している。伝世品として梔子文三稜形三脚皿（図 22）がある。



図 21 梔子文三稜形皿の素焼（スケール 5 cm）



図 22 梔子文三稜形三脚皿

（4）第 8 室 T r 11

T r 11 は、マウンド状物原の東端と第 8 室付近空間地で説明した通路を含めた範囲である。堆積状況からトレンチの北西隅方向から物原が形成され始め、同時に通路も 2～5 cm の厚さではあるが複数回の整地が確認できる。その後、廃棄場所が南西方向へ移動しさらに南方向へと変化している。その後は全体的に東方向へ積み上がる状況が確認できる。物原の東端部分とその上に通路の整地層が形成されており、物原が形成されながら、通路の整地も行われていたことが確認できた。

またマウンド状物原の東側斜面上には扁平な石が並べられており、物原への廃棄時に階段的な足場として使用していた可能性が考えられる。



第 8 室 T r 11（北西から）



第 8 室 T r 11（東から）

主な出土遺物

操業開始初期の堆積層（36・37・38・42層）から色絵素地透台付皿（図17）の破片が出土している。

中位の包含層（29a層）から染付窓絵花蝶文変形皿（図18）が出土している。同種のものが他のトレンチからも出土している。

中位の包含層（29a層）から荒磯文碗（図23）が出土している。

中位層（29a層）から色絵素地梅流水文輪花皿（図19）が出土している。サヤバチに融着したのものもある。

廃棄場所が南西方向へ移動しさらに南方向へと変化する中位の包含層（29a層）から染付人物文輪花皿（図24）が出土した。口縁部には唐花唐草の陽刻がありダミが施されている。陽刻や輪花皿であることから型打ち成形である。見込みには人物（羽衣の天人？）と人物（仙人？）の一部（肩部分？）が描かれており、高台文様は鋸歯状である。第8室 Tr 8の遺物に接合した。

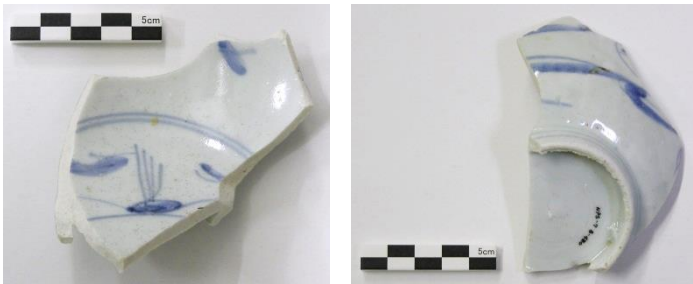


図23 荒磯文碗（スケール5cm）

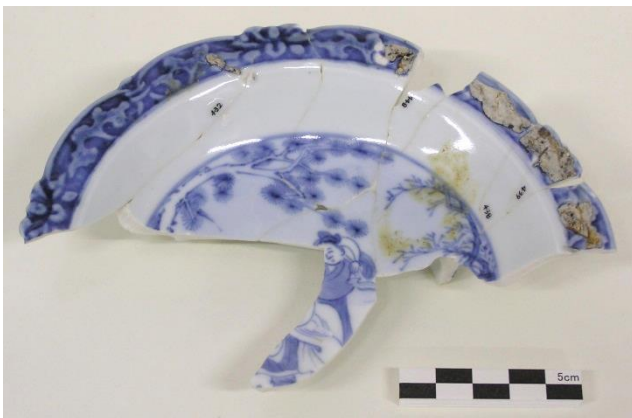


図24 染付人物文輪花皿（スケール5cm）

通路部分の整地層（36層）から染付青磁雪輪文波縁猪口（図25）が出土している。同種のもものが第8室Tr8、第6室Tr7から出土している。

中位から上位層（21・24・36層）にかけて青磁鎬文輪花皿（図26）が出土している。同種のもものが第6室Tr7から出土している。

東方向への堆積層（19・24上面・37層）中に染付草文皿（図27）が出土している。7寸皿で木盃形となっていない。高台文様は櫛文であるが櫛の長さが短く間隔も狭い。また櫛文の下部に圏線がないなど、古い形式の櫛高台である。高台内は釉が灰色となっている。（註 陶芸作家の方の見解では「ススクウ」と言われる現象で、焼成時に高台内部にガスがたまり変色するとのことであった。）



図25
染付青磁
雪輪文
波縁猪口



図26 青磁鎬文輪花皿（スケール5cm）



図27 染付草文皿（スケール10cm）



(5) 第8室 Tr 7

Tr 7は、マウンド状物原の東端縁辺部に位置すると考えられる。南側壁面では東側に向かって堆積している状況が確認できた。また西側壁面では堆積方向が地形の傾斜と同じ北方向に傾いている状況が確認できた。

Trの下層で東西方向に伸びる乱雑な石列を検出した。石列の南側（地形の高位方向）は窯築造時の排土が堆積しており。石列は窯造成時の排土を土留めするためのものと考えられる。

通路状の遺構は確認されなかった。



第8室 Tr 7（北から）



（東から）

主な出土遺物

窯築造時の排土の直上層（12層）で白磁草紙文小皿（色絵素地？）（図15）が出土している。第6室Tr 7（17b層）から出土したものと接合した。

窯築造時の排土の直上層（12層 最下層）で色絵素地透台付皿（図17）の破片が出土している。

窯築造時の排土の直上層（12層）で染付窓絵花蝶文変形皿（図18）が出土している。第9室Tr 7（10b層）から出土したものと接合した。

(6) 第8室 Tr 6

トレンチ6はトレンチ7のさらに1.3m東側に位置している。トレンチの北側は後世の攪乱を受けている。貼り床状の平坦面を確認しており、空間地部分であると考えられる。通路は第8室Tr 6とTr 7の間に位置すると思われる。



第8室 Tr 6（南東から）

(7) 第8室 Tr 8

Tr 8の南側壁面では西側に向かって堆積している状況が確認できた。また西側壁面では堆積方向が地形の傾斜と同じ北方向に傾いている状況が確認できた。堆積層の中に有機質を含んだ黒褐色粘質土の土層を2層検出している。他のトレンチでは見られない様相である。

主な出土遺物

中位層(24層(12・13・14・15))で色絵素地透台付皿(図17)の破片が出土している。第6室Tr 7(17b中層)の遺物に接合した。

中位層(24層(12・13・14・15))で染付唐花唐草八角猪口(図11)の破片が出土している。第10室Tr 6(13・14a層)の遺物に接合した。

中位層(10・15・17層)で染付窓絵花蝶文変形皿(図18)が出土している。

中位層よりやや下の有機質を含んだ層(15層)から染付人物文輪花皿(図24)が出土した。第8室Tr 11(29a層)の遺物と接合した。

中位下層(17層)から染付青磁雪輪文波縁猪口(図25)が出土している。

上位層(2・4下面・8層)から青磁染付輪花皿(図28)が出土している。サヤバチの蓋の内側に溶着し、また、サヤバチの口唇部には磁器質の薄いハマが部分的に溶着している。この状態から、焼成時には、磁器質の薄いハマの上に製品をのせ、その上にサヤバチの蓋をかぶせて焼成したと考えられ、一般的なサヤバチによる焼成方法と違う方法が使われている。



第8室 Tr 8 (北東から)



図 28-1 青磁染付輪花皿 (スケール 10 cm)

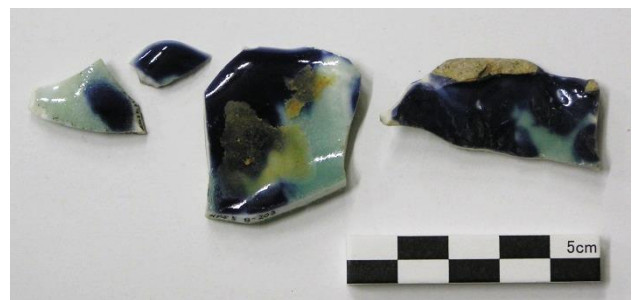


図 28-2 青磁染付輪花皿

上位層（8層）から海外輸出用の染付芙蓉手皿（図29）の破片が出土しており、7層から染付団龍文小皿（図4）が出土している。

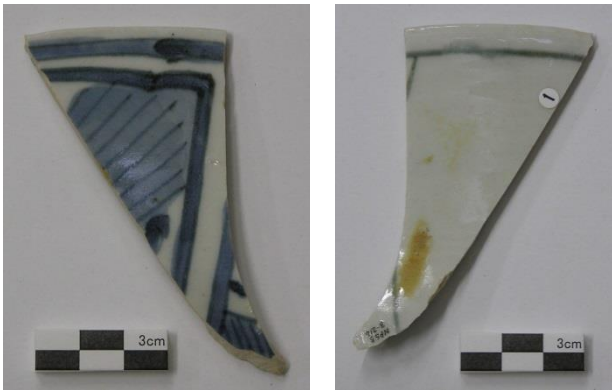


図29 染付芙蓉手皿

（8）第6室 Tr7

Tr7の南側壁面では西側に向かって堆積している状況が確認できるが、上部から東側に向かって堆積している状況が確認できる。

南側壁面の東側部分での下層の堆積状況は10cm程度の層が互層となっており、他の土層との堆積状況が違っている。また、土質も砂質であり、砂床の砂の廃棄層と思われる。この一連の堆積層が、このトレンチでの最古層である。この堆積層の中位部分から鍋島焼と思われる破片が出土している。（図30）小片であるが内面は染付と釉剥ぎ部分がある。外面は染付唐草文である。この堆積層より上位層は窯片や失敗製品、窯道具などを含む一般的な土層となっている。

北側壁面の東側下層に南側壁面の最古層に対応する砂床の砂の廃棄層と思われる層がある。その上の中位層までは東から西方向に向かって堆積しているが、中位より上層は西側を中心に堆積しており、最終的には西側の堆積を覆うように西から東方向に向かって堆積している。

東西壁面の堆積方向は地形の傾斜と同じ北方向に傾いている。

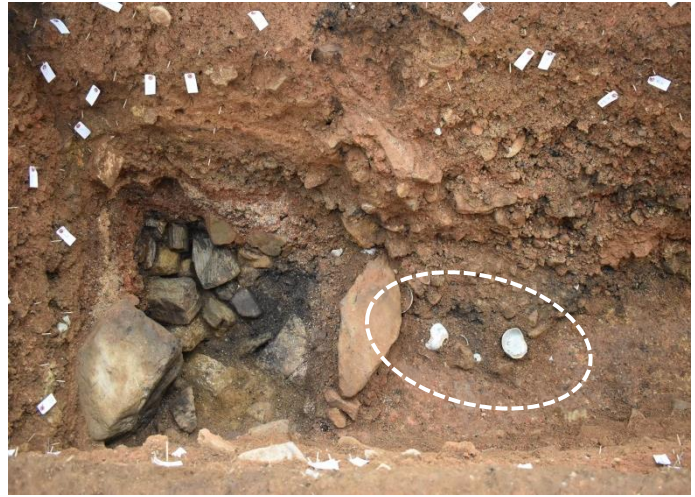
堆積順序としては東側に砂床の砂が廃棄され、その後、南東側あるいは南側から北西方向、北方向の堆積状況が中位まで確認できる。

中位から廃棄場所が変わり、トレンチの西側範囲を中心に堆積し、さらに北方向へと変化している。西側を中心に廃棄層が積み上がった時点で再度、廃棄方向が変わり、北側壁面で西から東方向に向かって堆積状況が確認できる。

マウンドの縁辺部と想定できる箇所は確認できなかった。



第6室 Tr7（北東から）



第6室 Tr7 染付碗出土状況（北から）



第6室 Tr7 青磁碗出土状況（上：西から 下：北から）

主な出土遺物

東側の最古層の上の中位層（22層）から高台無釉の青磁碗（図31）がまとまって出土している。最古層の下層（33・34層）から一般製品の染付碗（図32）がまとまって出土した。



図31 青磁碗



図32 染付碗

最古層の中位部分から鍋島焼と思われる破片が出土している。（図30）小片であるが内面は染付と釉剥ぎ部分がある。外面は染付唐草文である。

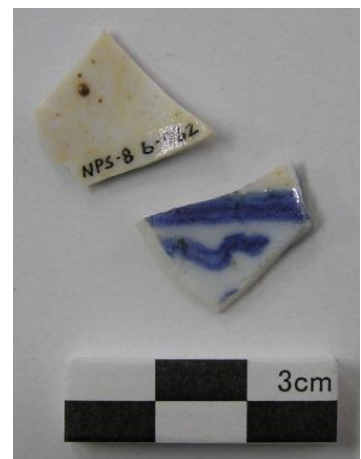


図30

中位層までの層（17b層）で白磁草紙文小皿（図15）が出土している第8室Tr7（12層）から出土したものと接合している。

中位層までの層（17b・22・22b層）に色絵素地透台付皿（図17）である。17b層出土破片が第8室Tr8（24層（12・13・14・15））から出土したものと接合した。

中位層までの層（22・22b層）で染付窓絵花蝶文変形皿（図18）が出土している。

下層（22c最下・42直上）の染付皿（内面文様の意匠不明 薄瑠璃が施され、葉脈が白抜線となる。）（図12）の破片が第10室Tr6の中位層（12a層）から出土したものと接合した。

中位層までの層（20b直下・22層）から色絵素地梅流水文輪花皿（図19）が出土している。

中位層までの層（14a・16・17b・22層）から染付人物文輪花皿（図24）が出土した。

中位層（14最下層）から染付青磁雪輪文波縁猪口（図25）が出土している。

中位層より上位層（12・14層）で染付草紙文皿（図33）が出土している。染付の文様意匠は破片のため不明である。一部には紗綾形文の陽刻がある。裏文様も高台文様も描かれていない。伝世品として銹瑠璃釉色絵草紙文小皿が知られているが、伝世品の裏文様は花唐草、高台部には鋸歯状文が描かれている。

上位層（6層）から青磁鎬文輪花皿（図26）が出土している。同種のものが第8室Tr11から出土している。

中位層までの層（17b・22・22b層）から、伏せ焼をしている一般製品の青磁三脚付香炉（図34）が出土している。底部の形態から本来なら、底部を無釉あるいは蛇目釉剥ぎ後、無釉あるいは鉄漿を塗って、チャツ等を使って焼成する製品であるが、底部もすべて施釉し製品を逆さまにして焼成している。製品を支える窯道具としてトチンを使用している。



図33 染付草紙文皿（スケール5cm）



図34

（9）第6室 Tr6

トレンチ6は物原部分ではないが、南側壁面の西側に物原縁辺部の一部と思われる土層を確認しているが明確ではない。この縁辺部部分から東側は通路と想定される固く締まった層を確認しているが、部分的なものであり明確ではない。位置関係からは縁辺部や通路の存在が想定される場所である。

7. 成果

主な調査内容は上記のとおりである。全体的な考察を記述して成果としたい。

（1）窯構造

窯の規模（全長、焼成室数）については17世紀後半の窯規模としては、一般的なものである。

第 10 室 T r 6 の堆積層の中位に位置する層（12 b 層・マウンド状物原層より上層）で窯の改修時に
出た廃材、排土と推定される層を確認している。窯改修あるいは焼成室の増設も考えられる。

第 7 室で天井を支えたと思われる柱の痕跡を確認し、また、窯跡の東側（物原が所在する反対側）で
窯解体時の残骸を廃棄した中に円柱状の塊が出土している。また、第 4 室では右側壁を約 65 cm 厚くす
る大がかりな補修をしている。これらの改修時期が同一か異なっているのか不明であるが、いずれにし
ても大がかりな補修があったと想定される。

特に柱の存在は天井部の崩落を防ぐものとして考えられる。天井の崩落は窯の存続にかかわるもので
あり、特に鍋島焼を焼成していた中央部分でもあることから、操業当時としては、かなり気を使う補修
ではなかったかと思われる。

このような補修が必要になった理由として、自然災害等も考えられるが、地震の記録では時期的に合
致するものはなかった。

（2）窯に伴う付帯施設

窯体の西側、物原との間に空間地を検出した。この空間地の目的あるいは利用方法について、現時点
では明確ではない。

瀬戸美濃では窯体の横に柱を立て屋根だけの建物の下にエンゴロ（サヤバチ）を積み上げて保管場所
としている事例（図 35）があるが、現時点ではこの空間地で柱穴痕跡などは確認していない。

調査現場は立木があり、トレンチの設定場所が制約されているが今後、この空間地の解明をすすめる
予定である。

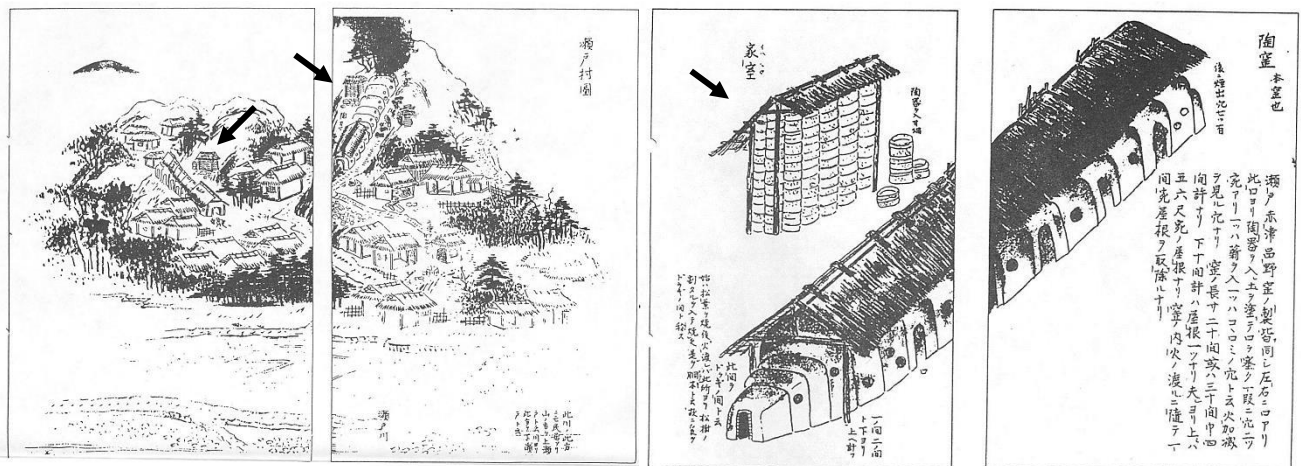


図 35

（註 2）（『張州雑誌第 12 巻』）

（3）物原

物原の旧地形を想定すると、西側を流れる溪流によって形成された谷であり、東側に大きく抉れていた
個所に失敗製品を廃棄し、物原が形成されたと考えられる。

旧河川の河道としては北端の最下段に谷痕跡があり、西側の小河川はこの谷につながっていた可能性
が考えられる。

特異な例として、鍋島焼を含む物原がマウンド状となっており、窯中央より上位の焼成室で焼成され
た一般製品を廃棄した物原と区分されていたことを確認した。窯中央より下位の物原は削平を受けてお
り確認できなかったが、同様な状況であったと思われる。

鍋島藩窯の製品管理については、元禄6年(1693)の二代目藩主光茂の有田皿山代官へ手頭(指示書)があり、その中に「一、献上之陶器之品、脇山ニて焼立、商売物ニ出シ候てハ、以之外、不宜事候条、(以下略)」とあり献上品が脇山(有田など他の窯業生産地)で焼かれ、商売物として出すことは、もつてのほか、よろしくないことであるとし、鍋島焼の意匠が他の窯業生産地で作られることを警戒しており、さらに「一、献上残物ハ不及沙汰、不出来物、猥ニ取散間敷候、年寄共并進物役之者江申談候上、時々、割捨可申事」とあり、不出来の製品は年寄や進物役に相談して、そのたびごとに割り捨てることとされている。これは鍋島焼の意匠が大川内山の外に漏れないための措置である。

大川内山の御用窯跡(藩窯跡)の調査(昭和27年・51年、52年調査)では窯体の左側にある物原にはお手伝い窯で焼かれた民窯製品が廃棄され、鍋島焼は藩役宅跡(旧代官所)周辺を中心として出土している。このことは、鍋島焼の失敗品は役人が確認をして割捨てたことの傍証といえる。

日峯社下窯跡では焼成に失敗した初期鍋島製品を小片になるまで破砕している。小片にまで破砕しているのは、献上品である鍋島焼が持ち出されないように、また、意匠が外部に流失しないようにする措置であると考えられる。

また、破片の廃棄も小範囲ではなく、トレンチ間での接合が見られるように、かなり広範囲に廃棄されていることが確認できている。しかし、狭い範囲に多くの破片が廃棄されているもの(図36)もあり、かならずしも徹底された廃棄方法ではない部分も見受けられ、廃棄までの方法は厳密ではなかった可能性も考えられる。

いずれにしても、失敗品は破砕して捨てるという規制(決まり)があることは、この時点ですでに製作に係わる管理下にあることの傍証であると考えられる。

物原に捨てられていることは、手頭(指示書)

とは異なる方法となっており、日峯社下窯跡での製作以降、さらに厳しい規制(指示)が出たと考えられる。特に、日峯社下窯跡で焼成したと考えられる製品が藩役宅跡(旧代官所)周辺(第Ⅳ地点)でも出土しており、操業途中で廃棄方法が変化したことについて検討が必要である。



図36 第8室 Tr11 染付人物文輪花皿
廃棄状況

(4) 製品について

日峯社下窯跡の出土製品は以下のように大きく4つに分類できる。

①初期の鍋島製品とされる一群で、特異な様相をしており、いわゆる初期鍋島と呼ばれているもの(以下、初期鍋島)

②成形、絵付けとも非常に精緻なもので他地域に既存する窯跡の製品に類似する高級磁器製品であるもの(以下、高級磁器)。

③絵柄や器形が高級磁器に類似しているが、全体的なつくりが粗放な製品。あるいは以下に説明する日常的な磁器と器形は類似するが、絵柄が異なった趣であるなど、高級磁器と日常的な磁器の中間的様相をもつもの(以下、中間的様相の磁器)

④成形、絵付けともに粗放なもの(以下、日常的な磁器)。

出土量では④が多量に出土しており、この窯の生産基盤を成すものである。以下、①→②→③となっている。破片ではあるが、量的には高級磁器類よりも初期鍋島の破片の方が多く出土している。

高級磁器、中間的様相の磁器、日常的な磁器の絵柄の違いや明らかな作風の違いは時期差と考えるより熟練者とそうでない者の違いと思われる。高級磁器については熟練陶工が直接製造したものと考えられる。日常製品については一般陶工が大量生産品として作成したものと思われる。中間的様相の磁器については一般陶工のうち手慣れた者が作ったものではないかと思われる。

日峯社下窯跡では色絵素地と判断できるものは鍋島であり、一般流通品で色絵素地として判断できる陶片は確認されていない。(註3) 日峯社下窯跡では基本的に日常的な磁器製品(碗、皿類)を製作し、その中で一般流通する色絵製品を作らずに特別なものとして献上品が製作されている。色絵製品を見た場合、商業ベースである一般流通品は生産しておらず、藩が採算性を度外視した献上品だけを生産している。つまり、色絵製品に関して言うならば商業ベースに乗っておらず、最初から制限があったと考えられる。

特異な出土遺物として第10室Tr 6から小片の染付製品(図10)が出土している。また、第6室Tr 7の下層から小片の染付製品(図30)が出土している。どちらも小片となっており鍋島焼の廃棄方法に準じており、鍋島焼の可能性が高いが、全体形が不明であり、また類似する伝世品も不明である。今後、類例などの調査を進めたい。

下層から出土したものとしては染付吹墨梅文輪花皿(図14)と白磁草紙文皿(色絵素地?) (図15)、色絵素地透台付皿(図17)が出土している。

色絵素地透台付皿は伝世品として内面に色絵で舟遊びを描いたもの(図37)がある。口縁部の如意頭文の陽刻や高台の透かしなど近似しているが、高台内に「角福」が書かれており、鍋島焼の基本である高台内無銘款の原則に合っていない。

日峯社下窯跡の出土品は小片に破碎されており、廃棄方法は鍋島焼に準じたものである。日峯社下窯跡の破片では高台内が無銘款なのか「角福」が書かれていたのかは不明である。この製品について今後、どのように考えるか検討が必要である。(註4)



図 37
色絵舟遊文透台付皿

(5) 海外輸出製品

今まで、お手伝い窯でも大川内山では海外輸出用製品は作られていないとされていたが、この調査により確認できた。鉢や合子などは良品に近いものであるが、出土点数は鍋島焼よりもはるかに少ない。比較的出土数の多い染付団龍文小皿はかなり粗雑な文様である。

全体的な出土傾向として、物原の上面や、さらに物原が拡大し通路を埋めるような段階で海外輸出用の製品が増えている。

(6) 操業年代

年代が明確な初期鍋島としては江戸城跡汐見多聞櫓台石垣地点の出土例がある。現時点では江戸城跡と同一種の遺物は確認されていないが、意匠が近似しているものとして第8室付近空間地から出土した瑠璃釉の猪口(図7)がある。

一般製品では第6室Tr7中位層(22層)から高台無釉の青磁碗(図31)がまとまって出土し、さらにその下層(34層)から一般製品の染付碗(図32)が出土している。

有田では青磁の高台釉碗は1640～50年代にかけて大量に生産されている。内山では1650年代後半には見られなくなるが、外山や周辺窯場では1660年代に入っても継続して生産された可能性があることが指摘されている。(註5)

鍋島の焼成に使われたサヤバチは物原の下層から普遍的に出土しており、操業当初から鍋島は焼成していたと思われ、現時点では窯の操業開始時期と初期鍋島焼成開始時期とのずれは感じられない。

操業終了前の製品としては空間地を覆った埋土から出土した輸入陶磁器などが該当すると考えられる。これらのことから、操業期間としては1650年代後半以降から1670年代の間におさまるものと考えられる。

まだ、整理途中であり、また出土遺物の層序関係も現場での記録を中心に考察している。今後、遺物取り上げ時の測量データなどを加味することで、より正確さが増すと思われる。今回の調査成果発表は途中報告としておきたい。今後の整理作業が進めば現発表と異なる場合が生じると思われるが、この点についてはご了承いただきたい。

註1 同様の補修痕跡は嬉野市の皿屋谷1号、皿屋谷3号(不動山窯跡群)でも確認されている。

東中川忠美 1998 平成10 嬉野町文化財調査報告書第9集「嬉野町の古陶磁窯跡」嬉野町教育委員会 小学館 1978 昭和53「世界陶磁全集8 江戸(三)」『皿屋谷1・2号窯』

註2 藤澤良祐氏からご教示いただいた。

藤澤良祐 1998 平成10 第9回九州近世陶磁学会資料「近世瀬戸・美濃窯の変遷」から転載

註3 一般流通品の白磁や染付の製品に色絵を施すことは可能であるが、輪郭線等を染付で描いたものは確認していない。

註4 日峯社下で出土した遺物と伝世品が近似しているが、一部が違うものとして薄瑠璃釉色絵唐花文小皿がある。出土遺物は高台が高く鋸歯文が描かれているが、伝世品は高台が低く圏線が書かれているのみである。高台が低い製品は有田時代のものであるとする考え方がある。

註5 野上建紀 2000「磁器の編年(色絵以外)」P.83 『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会

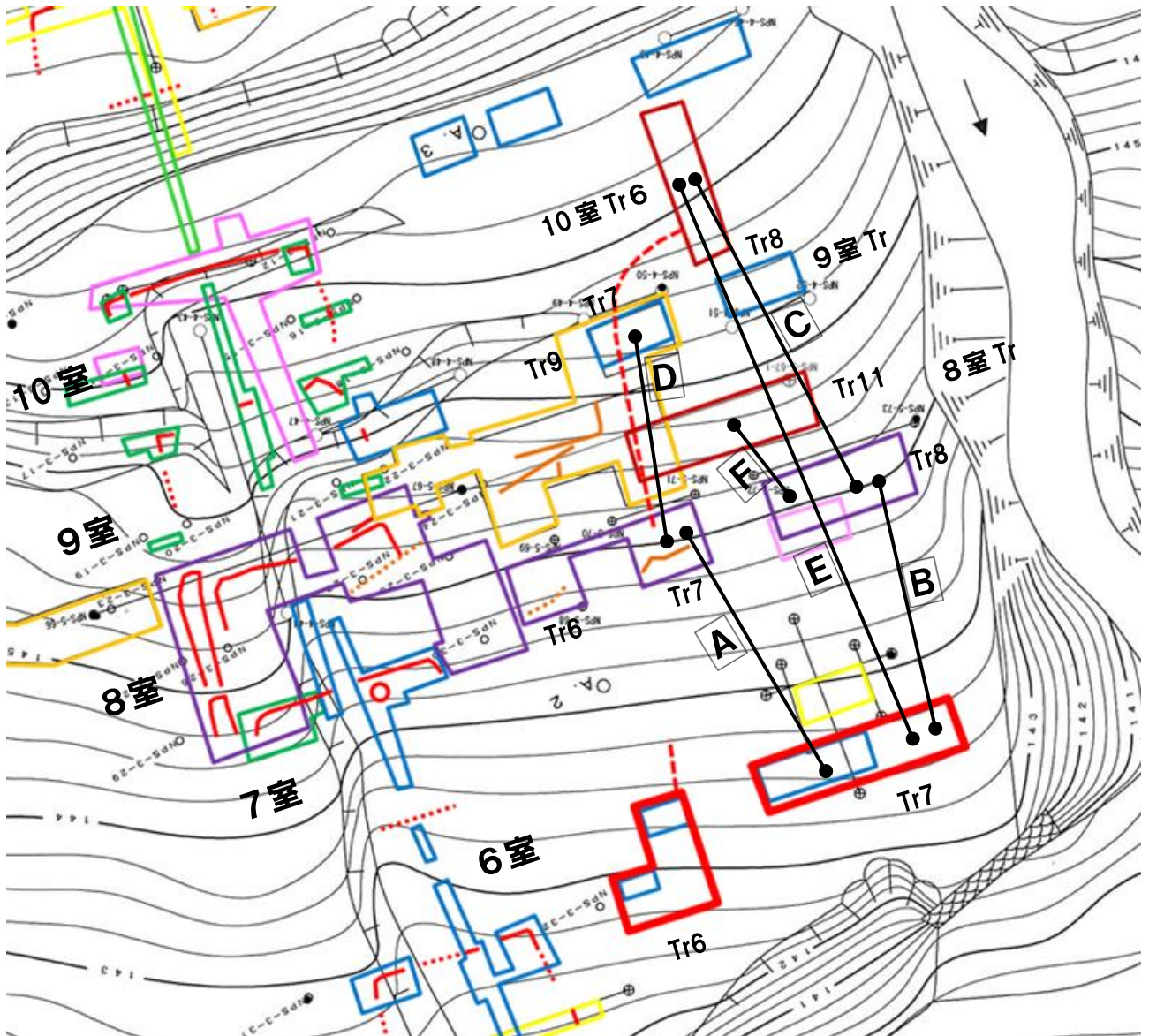
掲載資料

図8 小木一良 水本和美 2011 平成23 「鍋島 誕生から盛期作品まで」P.157 株式会社創樹社 美術出版

図16 佐賀県立九州陶磁文化館 2006 平成18 「将軍家への献上 鍋島」P.42

図22 前掲 図8 P.93

図37 佐賀県立九州陶磁文化館 1990 平成2 「柴田コレクション(1)」P.43 P.94



A 白磁草紙文皿



B 色絵素地透台付皿



C 染付唐花唐草八角猪口



D 染付窓絵花蝶文変形皿



E 染付皿



F 染付人物文輪花皿

図 38 トレンチ間 鍋島焼破片の接合関係図